

木が香り艶が語る、「手しごと」の心

極み輝く匠の技

筒井一雄 木工の世界



11月23日(木)から25日(土)にかけて、掛川市の大日本報徳社(だいじっぽんほうとくしゃ) 仰徳記念館(ようとくきねんかんと)で、「木工」「陶芸」「宝飾」の達人3名による「三人展 響きあう世界」が開催され、多くの作品が展示公開されました。

その内「木工」を手がけるのは、当町在住の筒井一雄(つういかずお)さん94歳(高郷区)。筒井さんは、50歳の頃から、営林署に勤務される中、ご自身で調達した木材や大井川の流水を使用した作品を作り始め、退職後は旧中川根南部小学校で講師として、木工の工作指導などを行ってきました。現在は、国有林での仕事で培った旋盤技術を活かし、木の育った環境とそれぞれの木が持つ魅力を感じられる多くの作品を制作しています。

この日、香木の「白檀(びやくだん)」で作られた花瓶や、「槐(えんじゅ)」「黒柿(くろがき)」「樺(けやき)」「杉」「桜」で作られたお皿やお盆など、数多くの作品が展示され、来場者を魅了しました。



Interview～匠に聞いた木工の魅力～

木工は我流で極めました。大井川に流れ着く流木はどれをとっても一つとして同じ物はなく、全てに自然が生み出した美しさがあります。その一つ一つが個性であり、同じ木を使っても全ての作品で違った個性差が生まれます。

たとえば、里山に近い木を使用すれば、油分をよく含み重厚感のある作品が生まれ、奥山の木を使えば、油分が少ないので軽い作品が生まれます。その木の特徴に合わせて作る作品を決めています。また、樹齢が長いほど奥深く良い作品ができます。そのため、長年の経験で培った自分の手の感覚で、一つ一つの木の心を読み、全ての木の特徴を見極め、理解することが大事なのです。



筒井 一雄さん

出展された作品の紹介(抜粋)



槐で作られた花瓶

(槐) マメ科の落葉高木。中国原産。街路樹に使われるほか、新芽は茶の代わりに、蕾や花、種子は染料や止血薬としても使われる。



桜で作られた小皿

(桜) 日本の代表的樹木。仕上がり美しく、耐久性が高いことから高級家具や茶筒、細工物などの工芸品に活用される。



黒柿で作られた大皿

(黒柿) 甘柿の一種。古木になると、黒い墨のような模様が入るのが特徴。油脂分が多く、から拭きするだけでも美しく光り輝く。



欗で作られた大皿

(欗) 広葉樹の代表的樹木。帚状の樹形が特徴で防風林として使われる。耐久・耐湿性に優れ、和太鼓などの楽器や神社仏閣の柱に使われる。

元祖 流木工芸 筒井一雄

📍 上長尾768-1
☎ 0547-56-0398

- ・工房見学をご希望の方は一度お電話の上、日程調整を行ってください。
- ・島田掛川信用金庫川根支店の道路向かい。
- ・流木工芸の看板が目印



工房横の展示場(一般公開)



▲自宅の工房では、昔ながらの旋盤機を使い、現在も毎日作品を作り続けている。「木工を始めて約30年経ちますが、まだまだ勉強することがたくさんあります」と話してくれました。



◀ハウジングの行程

コンパスで木板の中心を決め、金属製の円柱を木板の中心にビスで固定。その後、5種類の刃物で側面を整える。仕上げに特注のヤスリ180~320番を使いツヤを出す。

三人展 響き合う世界

筒井さんのほかに2名の達人がブースを出展しました。



茶陶の匠(島田市)
ほそい とうゆう
細井 陶遊

島田市金谷で採れる土と、志戸呂焼きに魅了され約20年前に埼玉県から島田市志戸呂へ移住。土の採取、釉薬づくり、窯焚きと全ての工程を自らの手で行う。釉薬は素焼きをしない「生掛け」、轆轤も電動ではない足で蹴飛ばす「蹴轆轤」など、あえて江戸時代の手法を行う。山野草に見守られた森の中にひっそりと工房を構える。

先人に敬意と意思をはせながら生み出す茶陶は、やさしく凜とした佇まいをみせる。



宝飾の匠(森町)

プラナス フランセスク

スペイン、カタルーニャの巨匠ガウディ建築のグエル公園にほど近いバルセロナの中心地に生まれ育ち、夏の大半はオリーブとブドウ畑が広がる内陸部で過ごす。14歳で師匠に弟子入りし、厳しい修行を積んだ後に独立。陶芸を学ぶためにスペインに来ていた現在の奥様と結婚。長男誕生をきっかけに来日。20代で独立。

日本の職人の仕事の完成度と感性に触発され日本へ移住、袋井市内で制作活動を始める。